

キャリル・チャーチルとフェミニスト・シアター (5)

—*Serious Money*における20世紀のフェミニズム演劇の特徴—

山田 久美子

ロンドンのナショナル・シアターは、1998年の秋、劇作家、ジャーナリスト、プロの劇場関係者に、20世紀の英語による演劇の中で重要であると思われる作品は何かという調査をした。調査によると、188人の劇作家の377作品がノミネートされた。その中の100作品が発表され、Samuel Beckettの*Waiting for Godot* (1953)が1位であった。アメリカ演劇では、Tennessee Williamsの*A Streetcar Named Desire* (1949)、Eugene O'Neillの*Long Day's Journey into Night* (1956)、Arthur Millerの*The Death of a Salesman* (1949)やEdward Albeeの*Who's Afraid of Virginia Woolf?* (1962)などが上位に入り、イギリス演劇ではJohn Osborneの*Look Back in Anger* (1956)、Arnold Weskerの*Roots* (1959)、Harold Pinterの*The Caretaker* (1960)、アイルランド演劇では、George Bernard Shawの*Pygmalion* (1913)、Sean O'Caseyの*Juno and Paycock* (1924)、J. M. Syngeの*The Playboy of the Western World* (1907)などが入っている。これらの100作品は、1900年前半、少なくとも半ばぐらいの作品が多数を占めている。

確かに、最近、演劇はロンドンにおいてさえも、集客数が減少傾向にあったり、観客年令が高くなってきているという問題が発生している。この問題に加え、作品に対する評価が定まらないため、最近の作品のノミネートは比較的少ないように思われる。

さらには、20世紀においても女性劇作家は5人しかノミネートされていない現状がある¹。1970年代頃になって初めて女性が活躍の場を得られるようになったことも原因であろうが、それだけとは言えないのではないだろうか。フェミニズム演劇としての主張に囚われ過ぎて、演劇作品として観客の心を捉えていないのも一因であるように思われる。

ノミネートされた女性劇作家の中でキャリル・チャーチル (Caryl Churchill) の活躍は最も目ざましく、*Top Girls* (1982)、*Cloud Nine* (1979)、*Serious Money* (1987) の3作品が100作品中それぞれ第16位、第50位、第77位に入った。チャーチルは、必ずしも好評とは言えない作品も書いているが、これまで継続的に劇を上演してきた。数多くのチャーチルの作品の中で、この3作品がフェミニズム演劇として20世紀の代表にふさわしく、重要とされるのはなぜだろうか。女性の主張として、また人間の主張としてテーマを追求してきたことに成功の理由があると考えられる。女性の社会進出とキャリアウーマンをテーマとした*Top Girls*、ジェンダー・アイデンティティを問うことをテーマとした*Cloud Nine*については、これまでそれぞれ試論において論じてきた²。*Serious Money*が20世紀のフェミニズム演劇の中で、主張するものは何か、他の2作品と共にノミネートされたのはなぜか。本論で*Serious Money*を分析することによりこれらの疑問を明らかにし、20世紀のフェミニズム演劇の女性劇作家の主張と演劇的価値について考察したい。

I

まず最初に、*Serious Money*の技法について述べることにする。

*Serious Money*は1987年3月27日、ロンドンのロイヤル・コート・シアターにおいて初演され、オリビエ賞、スーザン・スミス・ブラック賞などを受賞した。チャーチルは、ディレクターのMax Stanford-Clarkと共に俳優たちと2週間のワークショップを開き、作品を作り上げていった。ワークショップを行い、書き換えながら作品を作り上げるのは、チャーチルの得意とする手法である。

この作品はMax Stanford-Clarkの提案によるものであったが、チャーチル自身もワークショップの間にロンドンの経済の動き、つまり株の売買や先物取引などが行われている世界を目の当りにし、毎日*Financial Times*を読み、刺激を受けた。チャーチルはシティを舞台とし、それをこの劇に描きたかったようである。

The huge energy was something that impressed us and that we wanted to capture... I think a thing that does happen is that people confuse attractiveness and goodness... We wanted to create that paradox in the play — that tension between it being an attractive world and a dangerous one. (*File*, 84)

シティには巨大なエネルギーがあると考えたチャーチルは、同時に危険性を含んでいることも感じている。一見するとチャーチルが述べているように、株取引の世界の魅力と危険性をテーマにしているように思われる。Mimi Kramerが「この劇がロンドンで大ヒットした理由を理解するのは簡単だ」(*File*, 83)と言っているように、その理由は、魅力と危険性との緊張関係にあることが理解できる。株取引は、駆け引き次第で大きな成功をもたらす、世界を動かしているかのような錯覚に陥らせる。しかし、その世界にのめり込み過ぎると自分を見失う危険性を伴う。

*Serious Money*は2幕の劇で、チャーチルの他作品と同様にストーリー性はない。劇は、短い場面で区切られ、展開していく。さらに、それぞれの登場人物の台詞は韻を踏み、リズム感もっている。チャーチル自身、次のように述べている。

... it was a way of catching the energy and wit of that world. And it does have the effect of driving the play incredibly fast which seems very right for it. (*File*, 84)

押韻を用いるという手法はこの劇には有効であるように考えられる。変化する株価、そしてその取引など、そのスピーディな動きを表すのに、このようなオムニバス形式と台詞の押韻により、目まぐるしく動いていく様子が伝わるからである。Janelle Reinneltが「この劇のドラマツルギーの鍵はスピードである」(98)と指摘しているように、この劇において押韻がスピードを表すという意味で重要な役割を果たす。

その他の技法について述べると、この劇にはカーテン・レイザー（開幕劇）がある。その場面は、17世紀の劇作家Thomas Shadwellの*The Volunteers or The Stockjobbers* (1692)の一場面である。これは、どういう意味があるのだろうか。わざわざカーテン・レイザーとして用いられる理由は何だろうか。

この場面は、17世紀末のイギリスが経済的発展を遂げた時期で、世界的な視野で、株取り引きの話をしているところである。これは、過去において、エネルギーあふれる資本主義社会の時代であり、現代の経済界と重なり合う。カーテン・レイザーの後の第一幕は現代へと突然変わるが、この時代の跳躍は、過去も現代も社会的背景は変わっていないことを示している。チャーチルは *Top Girls* のようにこれまでも過去と現代の同じ状況を重ね合わせ、時間・空間の超越を描いてきた。*Serious Money* においてもその効果を考えることができる。

II

株取り引きの経済界の持つエネルギーを感じる一方で、チャーチルは何に危機感を感じたのか。チャーチルはフェミニストの劇作家であり、女性の問題を取り上げないわけがない。この作品でチャーチルは、どのように女性の問題を提示しているのだろうか。まずは、この劇の中心人物である女性シーラに注目してみたい。

カーテン・レイザーの後、舞台は20世紀、英国証券取引市場の大改革の時代へと一転する。ディーリング・ルームや株式のオフィスで若者たちが電話で株の売買や先物取り引きをし、経済の専門用語が飛び交う喧噪な場面が次々と展開する。男性が多い株取り引きの業界の中で、LIFFE（先物市場）のトレーダーであるシーラは、自分の考えを表す強い女性として最初からイメージされる。シーラが敏腕家であることは、電話で先物取り引きをしている様子でもわかるが、シャンペン・バーで、ギルトのディーラーであるグライムスとコマーシャル・ディーラーでシーラの弟であるジェイクとの3人の会話の中でも理解できる。

JAKE. I've no intention of working after I'm thirty.

SCILLA. Unless we're really determined to survive
(which I am).

JAKE. It probably means you have to fight dirty.

GRIMES. Listen, Nomura's recruiting a whole lot of Sloanes.
Customers like to hear them on the phones
Because it don't sound Japanese.
If you want to get in somewhere big—

SCILLA. Grimes, don't be such a sleaze.
Daddy could have got me in at the back door
But you know I'd rather be working on the floor.
I love it down with th oiks, it's more exciting.

JAKE. When Scilla was little she always enjoyed fighting
(better at it than me). (10-11)

この3人の会話で、シーラだけは冷静に話す。そして、ジェイクが「小さい頃から闘うことをいつも楽しんでいた」と言うように、シーラは闘うことを恐れない女性である。一方ジェイクは30才で仕事をやめたいと思っている。ジェイクのこの台詞は金融社会の世代交代の激しさを表し、ジェイクの「汚く闘う」という言葉には、この資本主義社会で生き残るためには、そうでなければ成功しないことを暗示している。

資本主義体制の中で、株の売買をする人々は、ダーウィンの適者生存の世界のようなシティで生き残りをかけ、争っている。シティの現実決してきれいなものではないことをチャーチルは描く。そのシティの現実の中で、ジェイクが銃で撃たれ亡くなった。シーラはジェイクが自殺したのではないと断言し、誰が殺したのかを調べるために動き出す。そこで、浮上するのは、コールマンによる食品会社アルビオンの買収である。いくつかの買収や取り引きや秘密情報が流れる緊張感あふれる世界を背景に、ジェイクの殺人事件を追うこととコールマンの買収計画が提示される。シーラは、コールマンに「あなたがジェイクを殺したのだ」(46)と詰め寄り、アメリカの銀行投資家ザックから取り引きにおいてのお金が動いたという秘密情報を聞き出すと、次のように言う。

He [Corman] was making serious money.

So Zac went back to Corman and I thought I'd better go to work despite Jake being dead because Chicago comes in at one twenty and I hate to miss it. I work on the floor of Liffe, the London International Financial Futures Exchange. (48)

シーラは情報を得て、仕事へと意欲を燃やす。この世界のエネルギーは、シーラのエネルギーの反映でもある。

III

この劇の登場人物は、男性14人、女性6人、その他多数となっている。チャーチルのこの劇は、男性社会である資本主義社会の中で、人数は少ないが女性の登場人物たちも活躍する。若い女性へのセクシャル・ハラスメントは多少提示されているが、女性を抑圧する社会というものは、大きくは取り上げられてはいない。

シーラは第二幕で、さらに、ジェイクに関する情報を得ようと買収したり脅かしたりして闘いながら、次第にこの世界に馴染んでいく。Elaine Aston は闘うシーラを次のように分析する。

The warring class discourses are gesturally encoded in Scilla's dialogue precisely because she is a woman engaging in masculine power- and language-play. (72)

男性と同様の力やエネルギーを持って仕事にのめり込むシーラには、家庭的な要素はない。挙げ句の果て、仕事のために、愛する弟ジェイクの犯人探しをやめてしまう。それは、ザックの語りから明らかになる。

So Scilla never came back.

She sent me a postcard of the Statue of Liberty saying Bye bye Zac.

She never did find out who killed her brother but I'm sure it wasn't

Corman or Jacinta or Marylou or any of us. (110)

アメリカへ行ったまま戻らないシーラは、大金が動き、秘密情報が飛び交い、駆引きや脅迫などのさまざまなやりとりが蠢く金融市場を舞台に活躍することで、世界的に社会進出を果たしたことになる。自由の女神の絵葉書は、自由な活躍を望む女性の象徴である。

また、第二幕には、もう1人、ジャシントという敏腕な女性が登場する。ジャシントの野心は、次の語りから分かる。

. . . The International Tin Council, what a scandal, thank God I wasn't in tin, the price of copper ruined by the frozen exchange rate, the two rates, and the government will not let us mining companies exchange enough dollars at the better rate, they insist we help the country in this crisis, I do not want to help, I want to be rich, I close my mines and sell my copper on the London Metal Exchange. It is all because of the debt that will never be paid because we have to borrow more and more to pay the interest on the money that came from oil when OPEC had too much money and your western banks wanted to lend it to us . . . (59)

これは第二幕冒頭の場面で、南米からイギリスまでの飛行機の中での語りである。ジャシントは、この語りの中で、お金持ちになりたいために鉱山の処分や株を売ることや資金運用についての作戦に考えを巡らせる。そして、銅減産の噂を流すことによって高く鉱山を売ることを考えたり、コカインの栽培で資金を稼ごうしたり、貧民病院建設と称して資金を要求したりする。貧しい人や子供までが、コカインのお金儲けのターゲットになる。ザックはジャシントに惹かれるが、ジャシントは、恋愛のために仕事を犠牲にしたいと考えている。ジャシントは、乗っ取りを計画するコールマンと全く変わらない。

シーラもジャシントも男性が活躍する金融市場で成功をするが、女性の社会進出として無条件に賞賛できるだろうか。

チャーチルは劇の最後で登場人物にその後の状況を語らせる。それによると、シーラはウォール・ストリートのスターになり、ジャシントはザックと来週結婚する予定で、また、中国での仕事にも着手している。この事実から二人の社会的成功をチャーチルは肯定しているかのように考えられる。

Amelia Howe Kritzer は、次のように言及する。

Serious Money deals with misplaced energy and misdirected revolution. While celebrating the energy, intelligence, and spirit of its divergent group of traders and dealers that includes women, blacks, and representatives of both working-class Britain and third-world countries, the play shows how their potential has been channeled into striving for personal success within new, but equally destructive, patterns. (163-164)

確かにチャーチルは資本主義社会におけるシティのエネルギーに感心を持った。チャーチルは、この劇で、社会の汚なさや金銭欲から利潤追求をしていく事実を明らかにしていく。またそれと同時に、その社会全体のエネルギーが、個人の力に反映していくことも描いている。特に、シティが男性社会を表しながらも、チャーチルは、シーラとジャシントに、女性が仕事をし社会的に成功する可能性を託している。シーラもジャシントも男性以上に巧妙に取り引きをしながら出世していく。そのエネルギーは社会のエネルギーに劣ることはない。さらに、チャーチルは、この劇で、ジャシントのようなイギリス人ではない人たちが社会的な成功をすることで、人種や階級の問題を超えることも暗示している。

チャーチルは、劇の中でいつも女性の問題や人種、階級などの社会的弱者の問題を提示するが、

それについての明確な答えを出しているわけではない。しかし、この作品においては、女性の社会進出や出世を賞賛しながらも、資本主義社会での利潤追求に夢中になり、家族愛や人間性を崩壊させてしまう危険性を明確に提示しているように思われる。

IV

チャーチルは、これまで、巨大な父権制の社会構造や資本主義社会において、女性に対する抑圧を明らかにし、女性がどのように生き、社会で活躍するかを描いてきた。また、それと同時に女性が社会進出をすることによって生じる様々な問題や内面的な葛藤をも提示してきた。それらは解決し難い問題である。たとえば、それはシーラが、*Top Girls* のマリーンのように仕事では活躍するが、何か空しさや疑問を観客に提示するというような問題である。その問題は、女性が父権制社会に進出するということは、何かを犠牲にしていかなければならないということを示すのであろう。

本論において、*Serious Money* に示される人種、階級、サッチャー政権に関しては、紙面の都合上、考察することはできなかったが、これらの問題は *Cloud Nine* においてのよういくつかの劇でチャーチルが取り上げている問題でもある。それは、20世紀の社会が少しずつでも解決しつつ、しかし完全な解決に至らなかった問題であるように思われる。チャーチルは問題を多く含む現代社会の中で、女性の問題をテーマにワークショップを行いながら、劇を作り上げてきた。そして、現在も積極的に劇作を続けている。チャーチルの劇には、まさに20世紀の物質文明社会の現実が描かれている。しかし、実はそれは過去の歴史の流れを見ると、同様なことが起こっていることも提示する。時空を超えた社会で、男性同様に活躍する女性がさまざまな経験を描くことで、チャーチルは、観客に問題を提起してきた。そして、ナショナル・シアターのアンケートで重要な作家としてノミネートされた理由は、問題提起しながらもチャーチルが、演劇の役割として、観客を楽しませることも忘れていない点にあるのであろう。現在も活躍目ざましいチャーチルは、20世紀のフェミニストの劇作家というだけでなく、21世紀のフェミニストの劇作家としても注目したい作家である。

注

- 1 ノミネートされた女性劇作家5人というのは、Churchillの他に、Timberlake Wertenbaker、Shelagh Delaney、Joan Littlewood、Lillian Hellmanである。
- 2 *Top Girls* と *Cloud Nine* についてはそれぞれ次の論文で取り上げた。「キャリアル・チャーチルの『クラウド・ナイン』—現実と幻想の交錯」 *Language & Literature*. Vol. 5. (1996年3月)、「キャリアル・チャーチルとフェミニスト・シアター (3) — *Top Girls* における構成と主題」 *Language & Literature*. Vol. 8. (1999年3月)。

引用文献

- Aston, Elaine. *Caryl Churchill*. Plymouth: Northcote House, 1997.
Churchill, Caryl. *Serious Money*. London: Methuen, 1987.
Fitzsimmons, Linda., compiled. *File on Churchill*. London: Methuen, 1989.
Reinelt, Janelle. *After Brecht: British Epic Theater*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1996.
Kritzer, Amelia Howe. *The Plays of Caryl Churchill*. London: Macmillan, 1991.
Royal National Theatre Repertory Leaflet. 30 November 1998 to 13 February 1999.